

1. 測定部位

1. 測定部位

(1) 骨 格

肥育牛の産肉形質を超音波診断する部位は、一般的には枝肉格付が行われる第6-7肋骨間と思われる場所である。この場所は、もちろん生体では確認できないため、肩甲骨の後ろ（肩後）に相当するとされている（図1参考）。実際には超音波画像上でロース芯面積やバラ厚測定の際の目安が必要となるため、肋骨を映し出す必要がある。このため、小さい牛では肩後から2cm前後（指1本分）、大きい牛では3cm前後後ろを撮影することで第7肋骨が画像上に映し出される。また、肥育末期などで肩後が確認できなければ、左前足を少し持ち上げ確認するか、脇から約10cm（拳1つ）後ろがスキャン位置に相当するので参考にされたい。

また、図1のように肋骨は背線に対して垂直ではない。肋骨の配列は最後肋骨へ向かうほど肋骨の胸部側が臀部側へ配列している。また、牛によっては肋骨の途中から「く」の字に曲がっているものも見られる。このことから、バラ部を撮影する際は肋骨の形状を考慮し、若干探触子（プローブ）を肋骨に沿うように下側を傾ける必要がある。

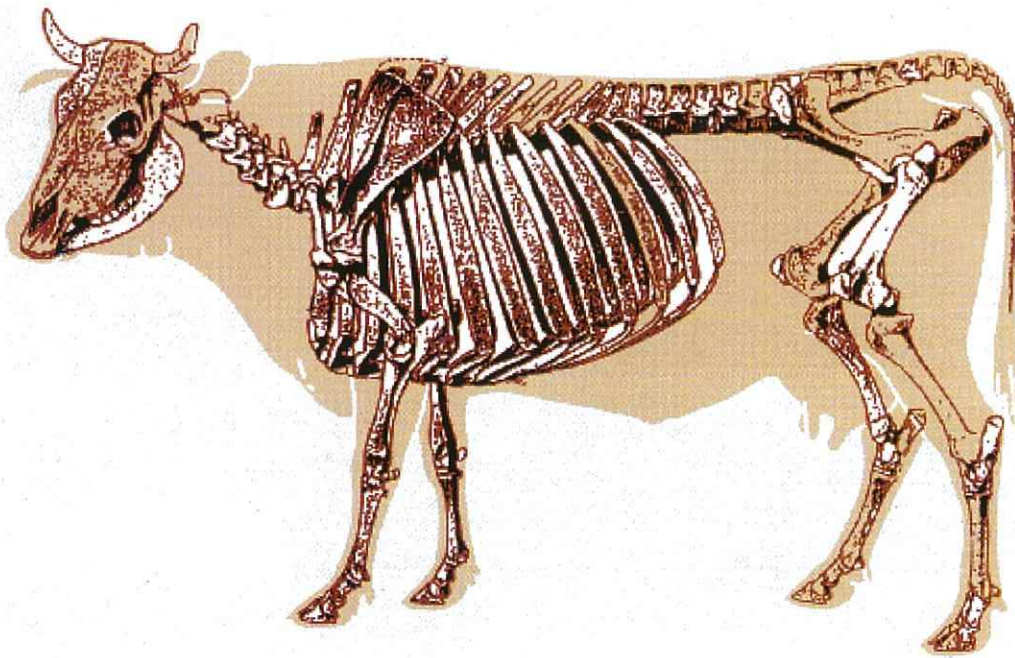
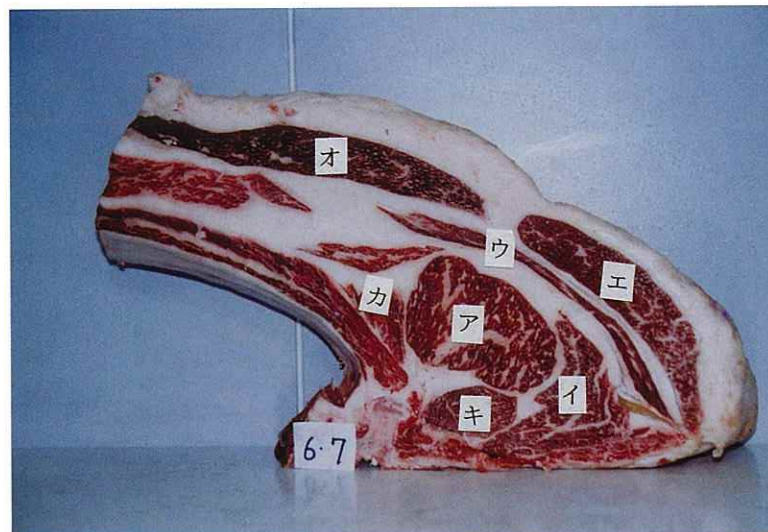


図1 牛骨格図

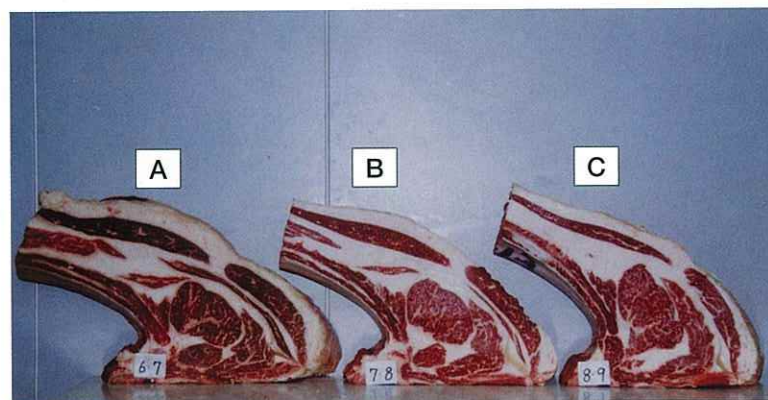
(2) 筋 肉

撮影位置である第7肋骨上では、胸最長筋はその筋肉として先端部分であり、測定部位が前後することでその形状は大きく変化する。すなわち、胸最長筋は臀部側へ移動することで形状は円形に近いものから横に大きくなり、店頭で見かけるサーロインステーキの形状を呈する。他の筋肉でも広背筋や僧帽筋は臀部側へ移動すると薄くなる。背半棘筋では三角状から逆「く」の字に変化していく（図2参考）。これらのことから測定部位がずれることで、その面積など測定値が大きく変化するので、注意が必要である。

1. 測定部位



ア：胸最長筋 イ：背半棘筋 ウ：菱形筋 エ：僧帽筋
オ：広背筋 カ：腸肋筋 キ：頭半棘筋



A：第6-7肋骨間 B：第7-8肋骨間 C：第8-9肋骨間

図2 肋骨間ごとの枝肉切開面写真

ポイント

測定部位は

肩後を確認し、指1・2本後ろをスキャン

バラ部はプローブを若干傾けてスキャン